

近鉄不動産株式会社

@WARPソリューション、ProActiveとASTERIA Warpの  
連携によりERP導入効果を最大化

6か月で基幹システムの連携部分を構築し、安定稼働を実現

近鉄不動産は、2006年夏から経理システムなどを皮切りに、基幹システムの見直しを始めた。その一環として、住商情報システムの統合型次世代ERPパッケージ「ProActive E<sup>2</sup>」を導入することになった。さらにアステリアのEAIツール「ASTERIA Warp」を採用し、ProActive E<sup>2</sup>と既存システムのスムーズなデータ連携を実現した。操作性に優れたGUIをサポートするASTERIA Warpによって、近鉄不動産は開発工程の短縮化を実現し、さらに将来にわたる拡張性や柔軟性も手に入れることができた。



ローレルコート南浦和

IT戦略を活かした経営と企業の  
競争力をアップさせる  
基幹システムへ刷新

応答性・操作性・運用性、  
三拍子そろった  
統合型ERP「ProActive E<sup>2</sup>」を導入

近鉄不動産は、近鉄グループにおける不動産事業の中核を担う企業だ。近畿圏を中心に、マンション分譲、不動産仲介、リフォーム事業、ホテル・ゴルフ場経営など、幅広く事業を展開する老舗的な存在として知られている。特にマンション販売は、近畿圏で首位を争う実績を誇っている。

業界トップを走り続けてきた同社は、早い段階から企業の基幹業務を支えるITシステムを自社で開発し運用してきた。しかし現行システムは開発からすでに15年もの歳月が過ぎており、経年劣化による抜本的な見直しを図る時期が迫っていた。

また、近鉄不動産の栗田孝二郎氏は「制度改革に伴う内部統制の強化や、四半期決算への対応、社内事業別の採算把握、予実管理の必要性もありました」と当時の課題を振り返る。そこで総合的な経営力と企業力の向上を目指すべく、基幹システム全体のリプレイス計画がスタートした。

まず2006年夏から、基幹系の要となる経理・財務関連を皮切りにシステムの検討が始まった。そして、前述の課題を解決する製品として、発売以来15年間で3,500社を超える導入実績を誇る統合型ERPパッケージ・ProActiveの最新版「ProActive E<sup>2</sup>」が、住商情報システムから提案された。

この製品の代表的な特長は、ユーザーの負担を軽減する多くの機能が盛り込まれている点にある。「たとえばCurlと呼ばれるリッチクライアント技術を採用し、Webシステムによる高い運用性や、スピーディな応答性、マウスレスの優れた操作性を提供している」と強調するのは、ProActiveチームを率いる住商情報システムの山本博史氏だ。

さらにユーザー権限に応じたメニューやアクセス制限、強力なログイン機能により、不正処理を防止できるメリットもあった。「懸案だった内部統制面でも、ProActive E<sup>2</sup>は充実したセキュリティ管理機能を備えており、我々の要件に合致するものでした」と、近鉄不動産の萩原章男氏は説明する。



企画部  
企画部長

萩原 章男氏  
はぎはら ちかお

企画部(情報システム担当)  
企画課長

栗田 孝二郎氏  
くわだ こうじろう

●CORPORATE DATA

近鉄不動産株式会社

近鉄日本鉄道の不動産部門を分社化して設立。近鉄沿線を中心に、マンション事業、都市型戸建住宅事業、流通鑑定事業(不動産仲介・不動産鑑定評価)、リフォーム事業(新提案型リフォーム・NEWing)、ゴルフ場事業、ホテル事業など幅広く展開している。

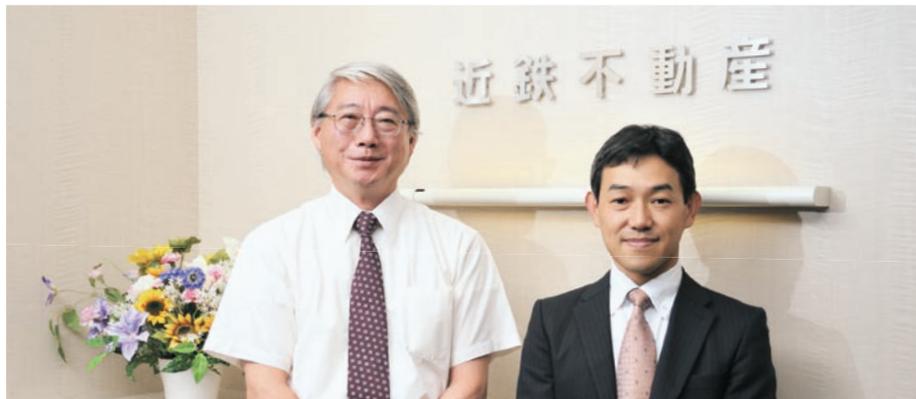
本社所在地 ●大阪市中央区難波2丁目2番3号  
URL ●<http://www.kintetsu-re.co.jp/>

**止まることの許されない  
基幹システムとの連携には  
ASTERIA Warpが最適!**

さて近鉄不動産のシステム全体像について見てみよう。営業支援システムには、購買管理、借入金、不動産流通、マンション販売、リフォーム、公共料金など、多数の既存システムがあった。一方、ProActive E<sup>2</sup>では、債権・債務、財務会計・管理会計、資産管理というモジュールが新規導入された【図1】。データ連携のパターンは多岐にわたる。そのため、これらをうまくつなげる仕組みが、システム構築を成功に導くキーポイントになる。特に、重要な業務を支える基幹システムは、ストップやトラブルは許されないからだ。

住商情報システムのProActiveチームは、さまざまな検討を加え、「ProActive E<sup>2</sup>自体をカスタマイズするよりも、データ連携ツールによるデータ変換で既存システムと連携するほうが、拡張性や柔軟性の面で有効」と判断した。そこで実績面や信頼性などを考慮し、最終的に選ばれたEAIツールが、アステリアの「ASTERIA Warp」であった。

ProActive E<sup>2</sup>とASTERIA Warpという国産品同士の組み合わせは、日本語環境が扱えると



いうメリットのみならず、保守面での素早い対応や、優れたサービス品質が保証され、まさにベストマッチングと呼べるものであった。またASTERIA Warpは、わかりやすいGUIベースの開発環境によって、インターフェースの処理が可視化され、仕様変更の対応も容易に行えるのだ。

**システム連携基盤の共通語  
“ASTERIA Warp”が誕生し  
システム構築を6か月で実現**

「ASTERIA Warpを採用したことで、結合テストもスムーズにクリアし、半年ほどの厳しい短

納期でもスケジュールどおり進めることができました」と、山本氏は同製品を高く評価する。

一方、ユーザーの萩原氏も「今後のシステム開発を考えると、ASTERIA Warpという製品名が1つの共通語になっていくはず。この部分をASTERIA Warpに任せよう!というように、他システムのデータ連携の話もスムーズに進められる」と満足気だ。本案件を成功に導いた住商情報システムのEAIチームは、長年にわたる数多くのシステム連携基盤構築の実績により蓄積・体系化されたメソッドロジーを持っている。本案件においてもそれらが十分に活かされ、開発工数の削減やシステム拡張時の柔軟性をより確実なものにし、短期間でのスムーズな導入を可能にした。

**ProActive E<sup>2</sup>との連携に、  
今後もASTERIA Warpを積極的に採用**

現時点で同社のシステムは、会計・販売など日々の業務を支えるルーチン業務を中心とした基幹系の整備が進められているところだ。同社の柴田氏は「将来的に情報システムを導入することになったとしても、今回採用したASTERIA Warpを十分に活用できる」と期待を込める。

また住商情報システムのProActiveチームも本案件を通じて、ASTERIA Warpに大きな手ごたえを感じている。山本氏は「近鉄不動産のケースのみならず、さらに他社でのProActive E<sup>2</sup>と既存システムとの連携にも、ASTERIA Warpを積極的に採用していきたい」という。データ連携の影の立役者、ASTERIA Warpの存在感は今後もますます強くなりそうだ。

【図1】近鉄不動産のシステム概要図



**@warp** わたしたちは  
つながります

@WARP(アットワープ)とは、アステリアのデータ連携ミドルウェア「ASTERIA Warp」を介し、さまざまな企業向けパッケージソフトウェアの連携を推進するプロダクトアライアンスです。

**ProActive E<sup>2</sup>**

「ProActive E<sup>2</sup>」(プロアクティブ イー ツー)は、発売開始から15年間で3,500社を超える導入実績を誇る「ProActive」シリーズの最新版で、“リアルタイム経営”、“経営の可視化”、“コンプライアンスの強化”、“セキュリティの強化”、“変化への対応”をコンセプトに開発された日本企業のためのERPパッケージです。

※ProActive E<sup>2</sup>は、@WARPプロダクトアライアンスの製品です。

**Asteria**  
アステリア株式会社  
<https://www.asteria.com/>

〒150-0012  
東京都渋谷区広尾1丁目1番39号 恵比寿プライムスクエアタワー19F  
TEL. 03-5718-1250

このカタログに記載された情報は2008年7月現在のものです。内容は予告なしに変更することがあります。Asteriaはアステリア株式会社の登録商標です。その他、各会社名、各製品名は、各社の商標または登録商標です。

©2020 Asteria Corporation

お問い合わせ先：